

## 樽前山の火山活動解説資料（令和4年2月）

札幌管区気象台  
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。  
なお、山頂溶岩ドーム周辺では高温の状態が続いていますので、突発的な火山ガス等の噴出に注意してください。  
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

### ○活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図1、図2-①～⑥）  
監視カメラによる観測では、A火口、B噴気孔群、E火口及びH亀裂東壁の噴気の高さは火口縁上概ね100m以下で経過しました。噴煙高度は昨年秋以降高まる傾向が認められています。
- ・地震及び微動の発生状況（図2-⑦～⑨、図3）  
火山性地震の回数は1月下旬以降やや増加の傾向が見られていますが、いずれも振幅は小さいものでした。地震は、主に山頂溶岩ドーム直下の標高0km程度で発生しました。  
火山性微動は観測されていません。
- ・地殻変動の状況（図4）  
GNSS連続観測では、火山活動の高まりを示すような変化は認められません。



図1 樽前山 南側から見た山頂部の状況（別々川監視カメラによる）

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』を使用しています。

今回の火山活動解説資料（令和4年3月分）は令和4年4月8日に発表する予定です。

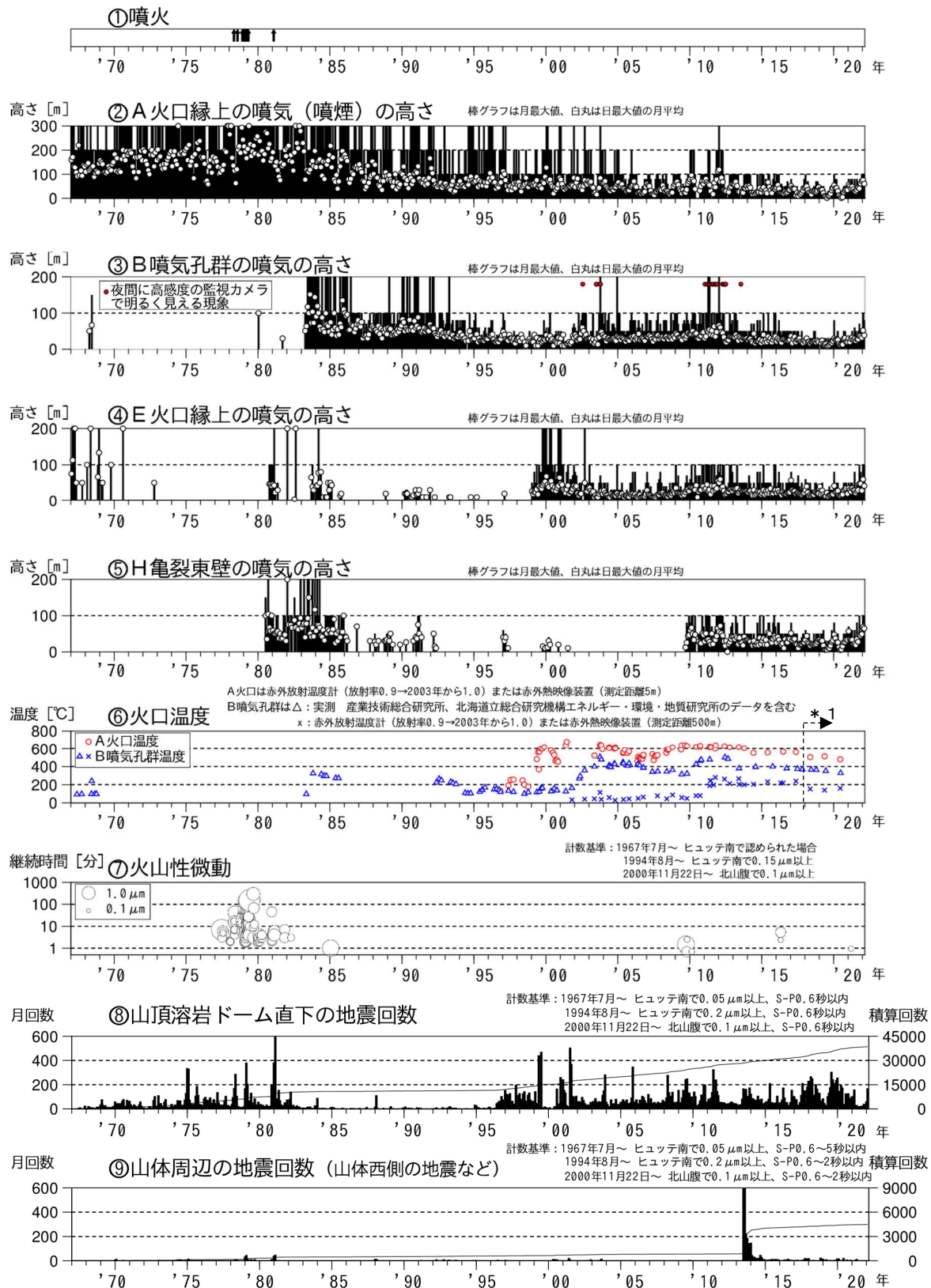


図2 樽前山 火山活動経過図 (1967年1月～2022年2月)

2018年(\*1)の機器更新以降では、以前と比較して温度が低く観測される場合があります。

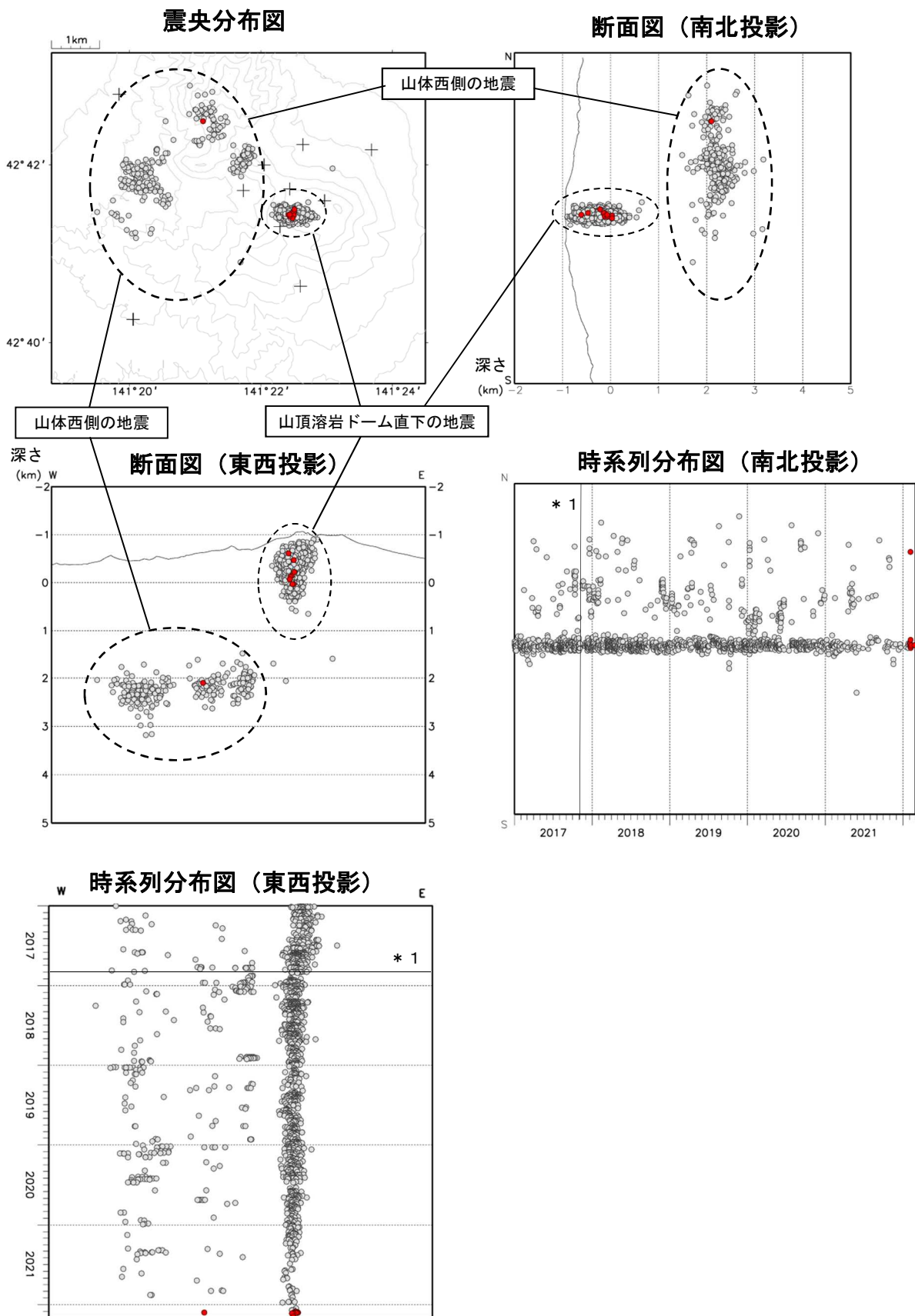


図3 樽前山 火山性地震の震源分布（2017年1月～2022年2月）  
 ○印：2017年1月～2022年1月の震源、●印：2022年2月の震源、+印：地震観測点  
 2017年10月31日（\*1）以降、震源計算に利用する観測点を変更しています。

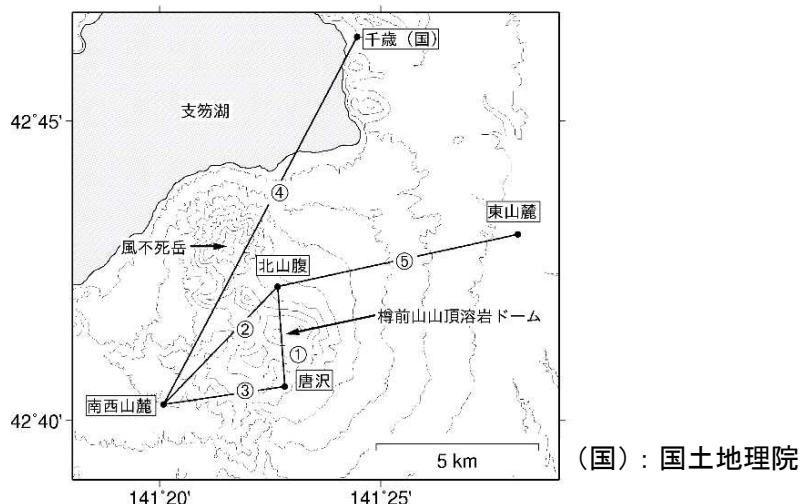
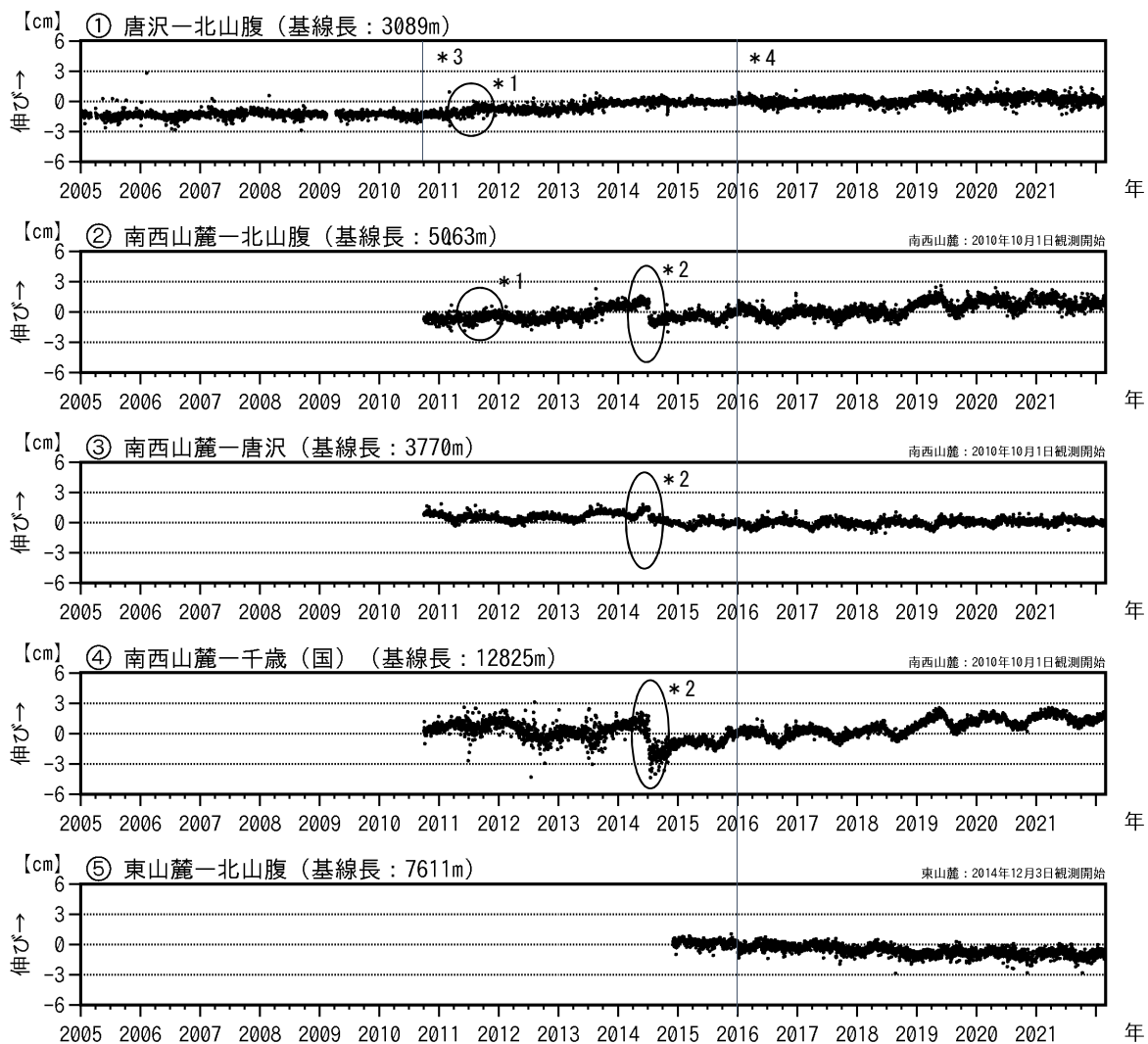


図4 樽前山 GNSS連続観測による基線長変化（2005年1月～2022年2月）及び観測点配置図

グラフ①～⑤は観測点配置図の基線①～⑤に対応しています。

グラフの空白部分は欠測を示しています。

①、②の楕円内の変動（\*1）は、2011年7月の機器更新によるものです。

②～④の楕円内の変動（\*2）は、2014年7月8日に発生した胆振地方中東部の地震によるものです。

2010年10月（\*3）及び2016年1月（\*4）に解析方法を変更しています。

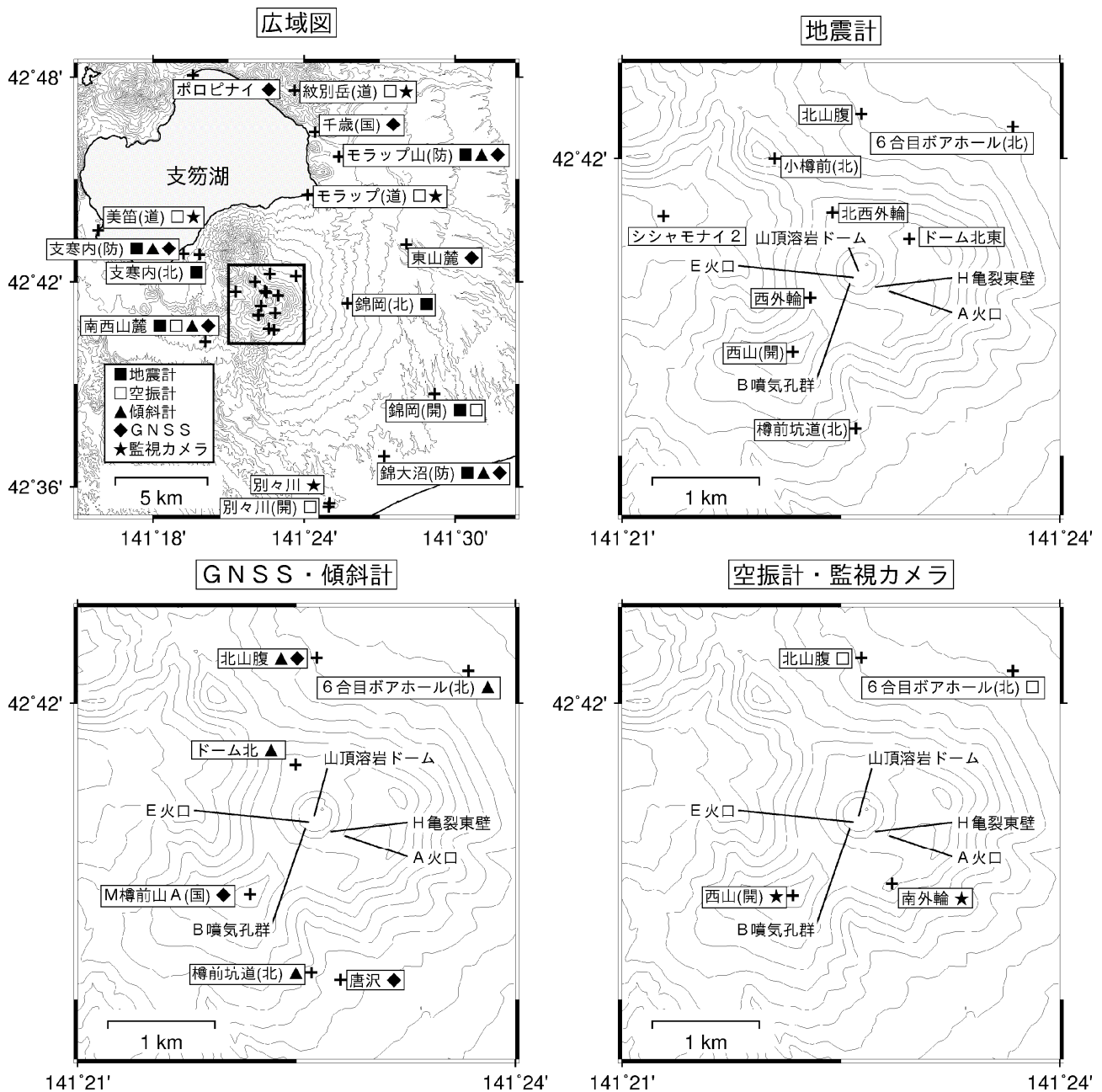


図5 樽前山 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で囲まれた領域を拡大したものです。

+印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

- (開) : 国土交通省北海道開発局
- (国) : 国土地理院
- (北) : 北海道大学
- (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所
- (道) : 北海道